

環境保全促進事業『藻場を守り育てる』

海岸漂着物調査&海藻類の観察

平成23年10月1日（浦村町）

1. 漂着物調査

当日の調査は、白浜の満潮線付近に長さ10メートル、幅3メートルの区画を3か所（50メートル間隔）にロープを張って設け、その中に3組に分けた参加者が入り、人工物のゴミを中心に拾えるだけ拾い集めました。採集したゴミは、別の場所に設けたビニールシート上でそれぞれの組で分類、各ゴミの数を数えて「ゴミ調査・データカード」に記入、そして3つの調査区画のデータを合計して、どのようなゴミがどれだけあったかを調べました。結果は、拾い集めたゴミの総数が3,101点、ベスト5は、硬質プラスチック破片2,187（70%）、レジンペレット378点（12%）、発砲スチロール破片小249点（8%）、発砲スチロール破片大166点（5%）、カキ養殖用パイプ37点（1%）という結果でした。

一見きれいに見える砂浜でも、意識してゴミを探すと、小さな硬質プラスチック破片などの多くの人工物が漂着していることが分かったと思います。今回の調査の後、砂浜に漂着している大きなゴミは拾い集めましたが、砂浜全体で今回見つかったようなゴミがどれくらいの漂着しているのか？そして、それらのゴミはどうなってしまうのか？ゴミはどこからやってくるのか？参加したひとたちにゴミの発生源も含めて、考えてもらえる機会をもてたのは有意義だったと思います。



2. 海藻類の観察

【海の博物館 平賀さんのコメント】

当日、白浜の波打ち際に漂着していた海草類はアマモとコアマモ、また海藻類はホンダワラ、ヤツマタモク、トゲモク、ミル、カジメの合計7種類でした。最初に、海草や海藻類の繁茂するのは春から夏にかけてであり、多くの海草や海藻類は寿命が1年であること、秋は繁茂の季節でなく潮が引かないことなどもあって、海草や海藻類があまり見られないことを説明しました。アマモとコアマモは砂浜に生育する海草で、アマモはかつて白浜周辺に生育していたが、今は見られず、北側の岬の向こうにある群生から流れてきたものであると思うこと。また海藻類については、白浜周辺や沖の岩場に生育していたものが岩からはがれて漂着したものであること。見つかったホンダワラ、ヤツマタモク、トゲモクの株は小さいけど、冬から春にかけて1メートル以上の大きさに成長すること。ミルは古代から食用にされ、「海松文様」や「海松色」という文様や色が存在すること。カジメは多年生の海藻でアワビやサザエの餌になること。ミルとカジメは、古くは海女の漁獲物であったこと。などを説明しました。

白浜周辺は、アカモクという半年で10メートル程の長さで成長する海藻が多く、春になるとアカモクを中心とする海藻類が繁茂する「ガラモ場」で覆われ、多くの海の生きものが生まれ、育つ海になるので、春の大潮の日に、海藻いっぱいの海辺を見ていただくこともお願いしました。

【水産研究所 岩尾さんのコメント】

漂着物として白浜海岸に流れ着いていた海藻類、これを「打ち上げ海藻」と呼ぶ。今回は海産被子植物のアマモ、コアマモ、緑藻はミル、褐藻はサガラメ、カジメ、ホンダワラ、ヤツマタモク、トゲモク、紅藻はマクサが見られた。

アマモ、コアマモは太古の昔、進化の過程で植物が海から陸上に進出し、陸上に適応して繁栄した後、再び海に生活の場を戻した被子植物である。これらは「海藻」ではなく「海草」と書いて「かいそう」と読む。陸上植物は地面から引き抜いてもすぐにしおれることはない。これは乾燥した陸上に適応して、水分を簡単には体から逃がさない仕組みがあるからであるが、アマモ、コアマモは海での生活に適応しているため、乾燥を防ぐための仕組みを失っている。そのため、打ち上げられたものはすぐにしおれてしまう。また、コアマモはアマモの子供の世代で「子アマモ」というわけではなく、「コアマモ」という名前の生物である。アマモという名前の由来はアマモの根元付近の白っぽい部分を噛むと、わずかに甘く感じられることによる。昔から人々に親しまれていることがうかがえる。

ミルという海藻も非常に古くから日本人にはなじみのある海藻である。食べることもできおいしい。韓国ではミルのキムチも存在する。ミル紋という柄として着物や器に描かれてきた海藻である。

サガラメ、カジメは海底で鬱蒼と茂る群落を作っており、「海中林（かいちゅうりん）」と呼ばれている。昆布や若布の仲間の海藻である。サガラメはアラメとも呼ばれている。アラメとその外見は非常によく似ているが違う海藻である。サガラメは根のように見える付着器という器官で海底の岩にしっかり付着しているので打ち上げ

海藻になりにくいのが、台風の後などは打ち上げられたサガラメを見ることもできる。カジメはサガラメよりも深いところに生育している海藻である。サガラメよりも岩への付着力が弱いのでこの海藻はよく打ち上げられている。これらの海藻は1mを超す大きさに生長して、寿命は数年。サガラメは食べることができ、鳥羽では収穫され食べられている。ホンダワラ、ヤツマタモク、トゲモクはヒジキの仲間の海藻である。これらは数10cmから1mを超えるものまでいろいろある。中には5mを超えるような仲間もある。ホンダワラも非常に古くから人々に親しまれている海藻である。マクサはトコロテンや寒天の原料になる海藻である。これも古くから人々の生活の中で利用されてきた海藻である。

これらの海藻、海草が生育しているところは、動物の生活の場でもある。また海水中に多く含まれている栄養分を吸収して生長するので、海水の浄化の役割を担っている。海水の浄化を人間がしようとすると、莫大なお金がかかるが、彼らは自然にそれを行っている。また、アマモなどは海底の砂地、泥地に根を張って生活しているので、砂浜や干潟の砂が自然に任せて流れ去っていくことを防ぎ、この砂地で生活するゴカイなどの動物の生活の場を保護している。このようにして保たれている海岸、干潟が自然環境にとって非常に重要な役割を担っていることは説明するまでもないほど最近では有名なことである。これらの海藻が気候変動や人間活動の結果、ある海域、湾からなくなってしまう「磯焼け」という現象が知られている。磯焼けは今に始まったことではなく昔から知られている現象であるが、急速に経済成長してきたわが国の沿岸では、その磯焼けのスピードも速く、目立つ現象となっていることも事実である。沿岸部の埋め立て、新建築物の建設などにより沿岸の生態系は破壊される。人間生活を便利にするためこのようなものを作るのであるから、それをやめて自然環境だけを守るということはできない。また、景観の面でも自然が残されたものを好む人がいれば、開発が進んだものを好む人もいる。大事なことは、開発するとその建造物の面積以上の広範囲に自然環境、動植物に影響を与えることを知る、また、その場所に元来どのような環境があるのかを知ること、意識することである。さらに欲を言えば、そのような影響を観察できる目と知識を養ってほしい。

